

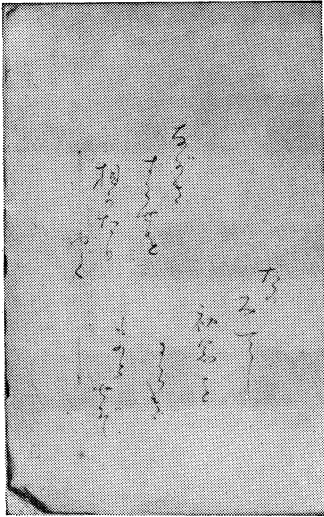
# 与謝野晶子『明星抄』の研究(一)

——解題と翻刻——

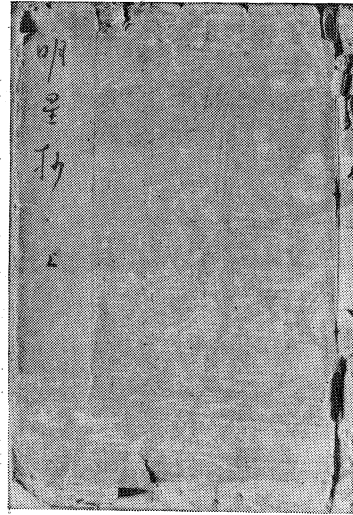
荻野 恭 茂

## I 解 題——書誌を中心として見た——

書名・『明星抄』。編著者・与謝野晶子。テキストは、相山女学園大学図書館所蔵「山崎敏夫文庫」本(甲種)<sup>(1)</sup>。和綴・袋綴、縦二十三センチ横十六センチ、全目選自筆歌散らし書き木版刷り・下絵木版全雲母刷り歌集、(元袋付)<sup>(2)</sup>(上)二冊。奥付に価格の表記なし<sup>(3)</sup>。大正七年三月二十五日、金尾文淵堂発行。発行者・金尾種次郎。印刷者・西村熊吉。装釘者・平福百穂。表紙、扉紙、短歌本文印刷紙、裏扉紙、裏表紙、より成る。ページ表記を表す数字なし。表紙絵は、源氏物語絵巻または枕草子絵巻風の(上)が女性(正装坐居姿の王朝の妙齡の貴婦人)で、(下)は男性(柱に寄りかかる姿勢の坐居で横笛を吹く王朝の君達)。本文印刷紙は(上)(下)共五十<sup>(4)</sup>。短歌本文は、それぞれ(①・㊦番の歌)その一オより始まり五十ウで終る。表紙絵は(上)が女性で(下)が男性であり、扉ウも同じである。裏扉のウはその逆である。すな



(写真B=一才)



(写真A=表紙)

わち、(上)・(下)・(首)・(尾)で男女一対、いわゆる「へめをと」仕立てと  
 なっている。順序から見ると女性が先だから、本書の女性中  
 心、あるいは女性優位性を匂わせているのかも知れない。と  
 にかく、(上)・(下)・あるいは各巻中の(首)・(尾)を合わせてみると、王  
 朝時代の君達の吹く横笛の瓊音を、妙齡の貴婦人が惚として  
 聴き入っている、との趣である。琴瑟相和を標榜としている  
 巻頭歌(①)を始めとして、淡い人生的翳りを揺曳させつつ、  
 さらに艶美や愛の葛藤をも内包する『明星抄』の世界の、内  
 容的な面の特色をみごとに象徴的に暗示する絵柄と構成であ  
 る。裏扉のオ右下に、著作権所有との横記の下に奥付書があ  
 る。表紙・裏表紙の色は、(上)が女性らしく華かな珊瑚色に近  
 い朱色、(下)が男性らしく落ちついた明るい鼠色(利久鼠色)。  
 表紙左肩上に、縦十六センチ、横三センチの貼題簽(写真A  
 参照)があり、その題字は晶子自筆。本文紙は、厚手の和  
 紙に百穂の筆になる、花絵を中心に京洛の風物(橋・塔・千  
 鳥・等)をあしらった絵柄の下絵が、金砂子・銀砂子を用い  
 た、いわゆる木版全雲母刷り(ただし乙種は中三十枚色刷り  
 《注1参照》)でなされている。絵の種類は、オウ一枚として十

種、この十枚がワンセットとして、順次五回くり返し展開している。作品は、その上に、自選・自筆になる短歌のみ一頁に一首の割で木版印刷されている。(H)各百首、計二百首を収む。すべて自選歌であるから、中年期、すなわち晶子、四十歳の時点における、先行自作歌への大凡の価値評価を読みとることができる。また、日本画壇の巨匠・平福百穂晩年期の円熟した芸境を示す装釘にも、それを良しとした晶子の嗜向的傾向―花と王朝趣味―が色濃くあらわれている。すなわち『明星抄』は、

形式美 (美術的要素Ⅱ装釘・書体<sup>7)</sup>) と

内容美 (文学的要素Ⅱ短歌)

とが、みごとに混融しつつ雅醇な趣の形成された、晶子熟年期 (四十歳) の芸術観を標榜する総合芸術的<sup>(8)</sup>性格の濃厚な、《自選歌集》の一つと、巨視的・やや演繹的見地から認容しておきたい。(帰納的方法による検証は、後稿の精緻な調査・考察にまつ。) これは、本質的には、その名を共有することく、雑誌『明星』の形成の精神と一脈通ずるものと思われる。また、『明星抄』に先行し、『明星』の余情を享ける活字本歌集や、『明星抄』成立の二年後 (大9) に編まれた、『詠源氏物語歌』(上・下) などとも……。

さらに、その系譜を遡行して源への道を辿れば、ついには遠く王朝の美意識にまで到りうること必定であろう。

(注1) 『明星抄』には、書誌学的に見て少なくとも、甲種・乙種の二種類が存する。(新見) 仮りにその一、本稿テキストの相

山女学園大学図書館蔵「山崎敏夫文庫」本系の本を甲種とすると、その特徴は、本文紙五十枚の下絵が、すべて木版雲母刷りであるということである。愛知教育大学図書館「近代詩歌文庫」蔵本、もこれに属する。乙種のそれは、同じく五十枚中、始めの十枚と最後の十枚が、木版雲母刷りで、その残り、すなわちその間の三十枚が淡い色刷り、(数色Ⅱ桃・青・茶・黄・紫等) であるという点にある。昭和女子大学近代文庫蔵本・関西学院大学図書館「丹羽記念文庫」蔵本・

大阪府立中之島図書館蔵本・松田好夫氏蔵本・藤井隆氏蔵本（下巻のみ御架蔵）、等がこの種に属する。

なお兩種、「本文」・「絵柄」ならびに、発行年月日・発行書肆等、すなわち「奥付」は全く同一である。

(注2) 松田好夫氏蔵本にある。

(注3) 松田好夫氏蔵本には、表紙裏の上隅に、古書肆「二誠堂」のラベルがあり、裏表紙前の遊び紙の下隅に、ゴム印で、「金五圓」とある。購入時期にもよるが、かなり高価なものであったと見てよからう。参考―同年刊（大正七年）の土岐善麿の随筆集『文芸遊狂』（280頁四六版）が、「壹圓貳拾錢」であった。

(注4) 『定本與謝野晶子全集第八巻』（昭56、講談社）の「著作目録」（445P）には、「上五十一枚・下五十枚」とあるが、これは誤記か誤植か。

(注5) 『明星抄』とはいえ、出版社にとっては、一商品には違いないので、享受層（購買層）を考えた上での出版書肆の要望する歌（例えば『みだれ髪』の歌）の許容も皆無ではなからう、という想定を加味して「大凡」とした。

（参考）

(a) 岩波文庫『与謝野晶子歌集』（昭13・7）の「あとがき」

(b) 改造文庫『みだれ髪・小扇・戀衣』（昭14・7）の「あとがき」

(a) 私は詩が解るやうになつて居ながら、また相當に日本語を多く知りながら表現する所は泣華氏の言葉使ひであり、藤村氏の模倣に過ぎなかつた。後年の私を「嘘から出た眞実」であると思つて居るのであるからこの嘘の時代の作を今日も人からとやかくと云われがちなのは迷惑至極である。教科書などに、後年の作の三十分の一もなく、また質の甚しく粗悪でしかない初期のものの中から採られた歌の多いことで私は常に悲しんで居る。この本（『岩波文庫』）に入れたのも後年の作に対する態度と違ひ、初期の歌に寛であることを私は恥ぢて居るが、これは歴史的と云う書肆の希望があつたからである。

(b) 「戀衣」あたりから今日の芽生が見出せなくもない。然しそれも三十七年程も前のものである。人が染筆を求められる時に「みだれ髪」の歌ばかり云つて来られた時があつた。それから「戀衣」の鎌倉<sup>※</sup>やの歌を代表作か何ぞのやうに云はれてきたのを、どれ程私は迷惑に思つてゐたことであらう。（※『明星抄』<sup>⑤</sup>として入集）

(注6) 百穂は、『明星抄』成立の翌年、すなわち昭和八年十月三十一日この世を去っている。彼は、『アララギ』誌上に常に美

しい絵と短歌をもたらししてきた、『明星』とは対極にあった『アララギ』の同人であった。すなわち、その歌壇意識を超えた美しい友情について、ここに特記しておかなくてはならない。

〔注7〕

故塩田良平氏は、『明星抄』の発行は大正七年三月だから晶子の染筆はこれより遡ること、それほど遠い時期ではあるまいと推定される。比較的肉太の筆蹟で初期のやうな判読に苦しむ書体はなく、書風は温雅典麗で全く安定した美しいものとなっている。恐らく油の乗切つてゐた頃であらう。」（塩田良平・佐藤和夫共編『與謝野晶子全歌集総索引』（昭45、有明堂）の「はしがき」中。）と記しておられる。

晶子自身は、『筆跡』（『優勝者となれ』所収の「中等教育と習字」中）のなかで、「私は肥えた字よりも細りとした字が好きである。「俗馬肉多し」と云ふやうに肥え過ぎた字は殊に嫌ひである。細りしたと云つても瘦せ過ぎた貧相なのは好まない。それから如何に善い書体でも読みにくいまでに崩した字は好まない。字は一面に実用性を備へてゐて欲しい。この意味で私は、王羲之、智永、緒遂良、蔡邕、虞世南などの法帖を時々眺めて楽しみ、特に此の諸家の楷行二体を敬重してゐる。：（中略）：私は羲之その儘の字を書こうとするのでは無く、書けるものでも無いが、少しでも羲之に刺戟せられて、まづい我流の細い字体に品位と深味と潤ひとを生み出したいと願ふのである。」と、自身の筆跡の志向を吐露している。

〔注8〕

この程度は、かつて松田好夫氏が、『みだれ髪研究』（昭27、一正堂書店）を編むの際に、第一部校異篇〈凡例〉中に、『明星抄』上下二冊は『みだれ髪』の歌四首を含んでゐるが、晶子の筆跡を木版にしたものであるから、色紙短冊の類と認めて校異に加へなかつた。」とし、すなわち、『明星抄』の文学作品的要素を抹殺してしまひたくなつた事実のある程のものである。

## Ⅱ 翻 刻

### 〈凡 例〉

一、本翻刻は、梶山女学園大学図書館蔵「山崎敏夫文庫」本『明星抄』上・『明星抄』下、によつた。

二、仮名は、変体仮名のものは通行体に改めた。草体の漢字は、意識的に俗字を用いたもの（集（魚））以外、筆書時代を考慮

して、正字体（康熙字典体）に還元させた。なお、諸橋轍次編『大漢和辞典』によると、「釈」は「釋」の略字、「恋」は「戀」の俗字とあるが、草体でも同じ様な形になるので筆書の問題を考慮して〈草体〉とみなした。

三、散らし書きの書式を、便宜上、一行に書き下した。なお、この上に冠した数字は、原典に存在するものではなく、後の論考のために稿者が付したものである。①く②③上、④く⑤⑥下。

四、誤記（濁点の脱落も含む）あるいは、晶子的特殊表記法によるものも、そのまま翻刻した。

☆

- ① たのみてし初念をにくきものとせずながきすくせを相かたりゆく
- ② 春の水ながるゝおとをそら耳す西の都のこひしき夜半に
- ③ 蝶ひとつ土ほこりよりあらはれてまへにまふとき君をおもひぬ
- ④ ちぎりねどおとろへはきぬ何となきうらはかなさをわれに知らせて
- ⑤ あかつきの竹のいろこそめでたけれ水の中なる髪に似たれば
- ⑥ われに似て玉の夜床にぬるものとうぐひすをこそおもひやりけれ
- ⑦ 金色の雲のとぎせる胸といひ戀のおのれを神のごとくす
- ⑧ しらんぐと涙のうつる頬をうつしかとみはありぬ春の夕に
- ⑨ えもいはぬはだかの少女かちとりて船やるとき夏夜の月
- ⑩ 山かげを出しや五人が紫のひがさあけたる船の上かな
- ⑪ 夏の水雪の入江のかもの羽の青き色して草こえきたる
- ⑫ 今日もなほうらわかぐさの牧をこひこまは野ごころわすれかねつも

☆

- ⑬ 野分姫もゝたり手とり自がねの沓してきたる花ぐさの上  
 ⑭ かなしくも戀わきまへぬやからにもまさりてこゝろあらぶる夕  
 ⑮ 天てらす神の御馬わが子らが豆をはます朝ぎりの中  
 ⑯ 自らをうすき黄色にかはりゆく秋の草とおもひなすかな  
 ⑰ わが胸はうつろなれどもその中にいとこゝろよき水のながるゝ  
 ⑱ 地はひとつ大白蓮の花と見ぬ雪の中より日の昇るとき  
 ⑲ おもふ人ある身はかなし雲わきてつくる色なき大ぞらのもと  
 ⑳ 山ざくらちるとひらきし小扇にこぼるゝものはかみにやはあらぬ  
 ㉑ むらさきの如來佛のはしらゑのふりぬる中にうぐひすをきく  
 ㉒ 火の中のきはめてあつきひのひとつまくらにするがごとく頬もえぬ  
 ㉓ 花にほふ二十四季をばこゝろとしゆくとぞつげむわれをとひなば  
 ㉔ 一人のわれをつらぬきひとの世と天とは通ずなつかしきかな  
 ㉕ 三月の柳を折りてあまりにもものをかくさぬ風流男をうつ  
 ㉖ 大きな日のおつるなど見ればうしおもひ上れるわがこゝろから  
 ㉗ 朝のあめさびしくなりぬ紫のからかささして七人されば  
 ㉘ 山しろやふるき都は寺々の元朝つぐる鐘めでたけれ  
 ㉙ ともすれば世にめでたかる人としてひかるゝひとの戀のなしざま  
 ⑳ みなうつくし白のまろ石青のいし君がたもとをまろびいづるとき

- ③① 何となく君に待たるゝこゝちしていでし花野の夕月夜かな  
 ③② 自らを溪のゆぶねに朝くだる自き雲かとおどろきぬわれ  
 ③③ しみゝくと口なぐさめをなすひとみなざるゝ人もあはれなるころ  
 ③④ おもひたまへみ胸の嶋にかてたらすされどいなれぬながされ人を  
 ③⑤ おほかたははなめく人になしさをとはむはやすきことゝしらずも  
 ③⑥ 伯父の寺たゞひとものさぼてんに春さめふりし庭のこひしき  
 ③⑦ あけくれのうぐひすの聲きさらぎの春のおもてにうきぼりをする  
 ③⑧ 秋の日の夕となればわがうれひ君がこゝろにまつはりてはふ  
 ③⑨ 春の潮海馬やうみの生ものやかよふみちとも月白うして  
 ④① ほの白き河原の見ゆる木のまよりかなしきはなし春の夕に  
 ④② 木によりてにほへるさうび秋山のつたにまさりてはかなきさうび  
 ④③ 朝のくもいざよふもとに敷しまの天子の花の山ざくらさく  
 ④④ わかき日の火中に立ちて相とひしそのごくねつのさかひにあらず  
 ④⑤ あやめさくわがいそのかみありし日のうすらごろもの夕すがた咲く  
 ④⑥ 春の月こひしき人のおもげやといふなる上の衣ぬぎて見ぬ  
 ④⑦ 水ぐさにかぜのふく時ひめだかはやけたるくぎのこゝちしてちる  
 ④⑧ 天王寺ゐなかの人のひとつく鐘の下よりすゝかぜのわく  
 ④⑨ あひそめし日かやわかれのなみだかや泣けば似るかなこゝろなごみて



- 49 山のゆにわがまろがたのうつれるを白き月夜とおもひけるかな  
 50 かきつばた白き國には王います少女の國はむらさきにして  
 51 ふぢの花わが手にひけばこぼれたりたよりなき身の二人あるごと  
 52 いつまでもあさやけのごとけしのごとにほへるものとおもひしころ  
 53 若き日はつきんとぞする平らなる野のにはかにも海に入ること  
 54 何ごとにおもひ入りたる白つゆぞたかき枝よりわなゝきてちる  
 55 鎌倉やみほとけなれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな  
 56 きくことはまろくたらへどいふことはおほくくるほしわがころから  
 57 ものおもへば中にみじかきひたひ髪しば／ぬれてくせづきしかな  
 58 十ばかり小馬ならびていなゝきて春かぜよぶや牧のすそ山  
 59 われ何と言はむか知らずころみにもゝとせともにあらむとかたれ  
 60 うきくさの中より魚のいづるごと夏木立をば上りくる月  
 61 まる山の南のすその竹はらにうぐひすなけり御寺に聞けば  
 62 われを見ればほの少女君見れば君も火なりとなみだながしつ  
 63 牡丹ちる日も夜も琴をかきならしあそふわが世のはつるごとくに  
 64 死ぬおもひつくる日悦喜またなき日ありてことばのかずになれにき  
 65 琴とればよき香いざよひ牡丹ちるべにの瑪瑙の花づくゑかな  
 66 わが肩に春の世界のものひとつくづれこしやと御手をおもひし

- 67 にはひするきぬきてありといひちらす春かぜにくむ三四の君よ  
 68 ませばこそ生きたるものはさひはひとこゝろめでたく今日もありけれ  
 69 夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若うまみふかれけり  
 70 小さめふるあかぎだひらの百合の花なでしこまじりしやがまじり咲く  
 71 ふるさとの潮の遠音のわが胸にひよくをおぼゆ初夏の雲  
 72 天地の中にたゞよふかなしみをわがものとしてしたしむ夕  
 73 紫の水晶のごと身の見えぬくらき座敷の七月のあさ  
 74 かきつばたわか紫はなつかしきわが歌舞伎子のおもかげにさく  
 75 夏のくにあしの白根のたわつくる水こそめぐれあけぼのゝ家  
 76 白樺の冬の木立の水かげは底つ宮居のまろばしらして  
 77 何よりも消やすきものところのいのちをおもふ君が戀人  
 78 海こひし潮の遠鳴かぞへつゝ少女となりし父母の家  
 79 青原の野かぜの中に深山よりこし香まじりぬ白百合の花  
 80 ほのかなる野をさまよひぬひとつ家のわがやをかしきおぼろ月夜に  
 81 つやゝかに春の灯ならぶまる山へ法の火とる音羽の山へ  
 82 冬きたる大き赤城の山腹の雲おひおとす木がらしのかぜ  
 83 ゆかりなき心のくまに出没す魔につかはれてあるらむきみは  
 84 あめの日はわれをみにこずかさゝしてあさがほつめどあふひをつめど

- ⑧5 くれなゐの小さき杯たまはれば椿の花のこゝちしてとる  
 ⑧6 はかなかるうつし世びとの一人をば何にもわれはかへじとおもへる  
 ⑧7 唯ごとく故よしつけてわれら居るそれならじかとたづねても見つ  
 ⑧8 かやのはのかたちにならふ人かとおのれをわらふおもひやせつゝ  
 ⑧9 ふたつ三つわすられぬことかきこしてこゝろの上をはしりゆく人  
 ⑨0 六月をうしとおもひぬにはかあめ麥の穂にふるらうがはしさに  
 ⑨1 落日はつよき力をうちわすれ女のごとく戀のみに燃ゆ  
 ⑨2 くらやみの底つ岩根をつたひゆく水の音していねえぬ枕  
 ⑨3 こほろぎや男女の文がらの多きが中にうづもれてきく  
 ⑨4 こひ人にはあはむ日とほしふるさを見む日しらすいかゞすべきぞ  
 ⑨5 ひとすぢにあやなく君が指おちてみだれなむとす夜のくる髪  
 ⑨6 蓮をきりひしの實とりしたらひ舟その水いかに秋のながあめ  
 ⑨7 六とせへぬかしこき人にいさめられおろかなる世にどよまれながら  
 ⑨8 たびの日のわたくしごとをおもへりともいはいぬ時君をそしりき  
 ⑨9 汲みて飲む酒かもされでにおひする煙のみわくあやしき甕よ  
 ⑩0 獅子王に君はほまれをひとしくすよろこぶときもかなしむ時も  
 ⑩1 そのかみの君王のねや金色のまくらにかよふ秋の夕かぜ

- ⑩<sub>2</sub> われのいふかなしきことゝ世の人のかなしむことゝすこしことなる  
 ⑩<sub>3</sub> 秋の夜のほかげにひとりものぬへば小き虫のこゝちこそすれ  
 ⑩<sub>4</sub> おきふしになやむはかなきこゝろより萩などのいとつよげなるかな  
 ⑩<sub>5</sub> 戀びとは現身後生よしあしもわかつしらず君をこそたのめ  
 ⑩<sub>6</sub> あぢきなく石につまづくこゝちしてにはかにきれし三味のいとかな  
 ⑩<sub>7</sub> いとあはれにあらたまりゆく人のおやのこゝろをわれもしる日となりぬ  
 ⑩<sub>8</sub> 夕されば馬車して君にあひにきぬ無官のひとの娘なれども  
 ⑩<sub>9</sub> 今ひとたびわれを忘るゝ日はなきやおやのいさめしこひのごとくに  
 ⑪<sub>0</sub> あなこひしうちすてられしうらみなどもゝかずにもあらぬものから  
 ⑪<sub>1</sub> 仁和寺を小だかき丘にながめつゝ嵯峨にいそぎぬ春の小ぐるま  
 ⑪<sub>2</sub> あらし山名所のはしの初雪に七たり渡る舞ごろもかな  
 ⑪<sub>3</sub> ほとゝぎす阿波下ふさの海上に七人きゝぬ少女子まじり  
 ⑪<sub>4</sub> 相人よ愛欲せつにおもやせてうつくしき子によきことをいへ  
 ⑪<sub>5</sub> たにぞこのゆぶねにちかくなる水をあそべるうをのこゝちしてきく  
 ⑪<sub>6</sub> 新しく湧き上りたる戀のごと雁來紅の立つはめでたし  
 ⑪<sub>7</sub> 口びるをおしあつるごとくれなぬの椿ちりきぬてのひらの上  
 ⑪<sub>8</sub> 一切をやゝあきらかに見通す日われにきたりてものたらぬかな  
 ⑪<sub>9</sub> 飽くをもて戀のをはりとおもひしにこのさびしさも戀のつづきぞ

- ⑩ 君をこひゆめまぼろしの中に居てわれこゝろよく書きちらすこと  
 ⑪ かつてわがもとめしものゝひとつにはあらじかとしもものをおそるゝ  
 ⑫ 十月はおもふ男のさだまれるあとゝごとくにのどかなるかな  
 ⑬ やうやくにおもひあたれることなりやかくものとふ秋の夕かぜ  
 ⑭ このひとは何によらましきかなれし手してうたかく君によらまし  
 ⑮ さく花の木のもとまつりこひ人のころもの下にうたをこそおもへ  
 ⑯ 人すまぬとなりの家の芝くさのきたなく青みそよかぜぞふく  
 ⑰ ほとゝぎす聞きたまひしかきかざりき水のおとするよきねざめかな  
 ⑱ 三千里わがこひ人のかたはらにやなぎのわたのちる日にきたる  
 ⑲ おもしろくかなしく妬くさまゝにかはるこゝろのうづまきをめづ  
 ⑳ よそことになみだこぼれぬある時のありのすさびにひきあはせつゝ  
 ㉑ 君とこふよろづ盡くしてまよけせむこゝろながらも見えぬものから  
 ㉒ 春の鳥今巢がくれてある冬と猛におもひぬ胸をおさへて  
 ㉓ よろこびとかなしみと皆君によりするとばかりはうたがひもなし  
 ㉔ やははだのあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君  
 ㉕ ひやゝかになみだのごとく石走る淺瀬の波の身にしみぬわれ  
 ㉖ みづうみのそこより生ふる杉むらに日ぐらしなきぬはこね路くれば  
 ㉗ わがこゝろさびしきいろにそむとみぬ火のごとしてふことのはじめに

- ⑬⑧ よこざまにそねむ人らの中に居て初戀の日のこゝろ忘れず  
 ⑬⑨ 戀をして年ごろふると髪白き長者のとひにいふこともこれ  
 ⑭⑩ ふるさとをこふるそれよりやゝあつき涙ながれきその初めの日  
 ⑭⑪ せはしげに金のとんぼのとびかへるそらひやゝかに日のくれてゆく  
 ⑭⑫ いそくさにこほろぎなくや夕月のひがたあゆめるひと五六人  
 ⑭⑬ かたらひししるしにとりし小ゆるぎの磯の石にも似てさく菊よ  
 ⑭⑭ 金色のちひさき鳥のかたちについてふちるなり丘の夕に  
 ⑭⑮ 玉にやゝまさるまくらしよるのゆめあかつきのゆめ見てたれ君よ  
 ⑭⑯ 白き菊やゝおとろへぬ夕されば明眸うるむ人のごとくに  
 ⑭⑰ あめふればわれの若さにさびしさの入りくるかどを見るこゝちする  
 ⑭⑱ 噴水の白き石見て秋きぬと都の少女うちもおどろく  
 ⑭⑲ 秋のばらさびしと言ひてひとつみこひしとかこち一つ摘むかな  
 ⑭⑳ 秋はよしかがに木のみのもらるゝとのきまで霧のくだり來ぬると  
 ⑭㉑ 手にちかくたやすきは皆人とりぬ千ひろの底の玉は誰がごと  
 ⑭㉒ 秋立ちぬ子のことよりも立ちまさりしみゝおもふこともつわれは  
 ⑭㉓ ありてわれたふとからむとそらに日のかくるこゝろをつゆきずつけず  
 ⑭㉔ 古女君とその世の相聞きのうたもてたれるあめつちに居ぬ  
 ⑭㉕ 飽くしらずいなばのかぜを大寺の堂にのぼりてくらへる男

- ⑮⑤ さびしさに百二十里をそゞろきぬといふ人あらばいかならむわれ  
 ⑮⑥ 世にあるも恩をになへるこゝちする女人の身こそはかなかりけれ  
 ⑮⑦ 相こひぬ慢気慢心たらざるを知らぬ少女ときよき男と  
 ⑮⑧ こゝろよりけぶりの立つといふことを二三日病みて知れる人かな  
 ⑮⑨ わがつねにこゝろにのぞくほらあなをいでしがごときくろき蝶かな  
 ⑮⑩ いつとなく君がこゝろはさだまりて百年ほどはうごかじと見ゆ  
 ⑮⑪ はやもわれ白金の世のかたはしを踏みにきつるか若き日をでて  
 ⑮⑫ 草の庭まへに見ながらいひをくふ男おもひぬ逢ひにこぬ時  
 ⑮⑬ いなゝきぬ秋今きたるかぜふきぬ神のつくりし白がねの馬  
 ⑮⑭ われわする忘れて胸に誰あらむあゝ無邊際むねに人なし  
 ⑮⑮ 友染の袖十あまりまるうより千鳥きく夜を雪ふりいでぬ  
 ⑮⑯ たやすげに死なむとちかふわかうどもありのすさびにあはれとぞおもふ  
 ⑮⑰ 十五きぬをしの雄とりの羽に似たる髪をむすばれわれは袖ふる  
 ⑮⑱ 白楊のめでたきことをはてもなくおもへる時の秋のかぜかな  
 ⑮⑲ 大宮も白鳥の羽も水いろに見ゆる夕となりにけるかな  
 ⑮⑳ 今はさもあれとおもへどいつの日の念の力かもの妬みして  
 ㉑ ものおもへば草の中なる二ものまろは楊に秋のかぜふく  
 ㉒ わが小ゆびきぬをなぶれるそれよりもかろくいかだをながす水かな

- ⑦④ このひとは金の木の實のなる國へおはれてこしやのがれてこしや  
 ⑦⑤ 山の草水ふきあがるかたはらにあぢきなしやとそらを見るかな  
 ⑦⑥ 草むらを塔のことくもみする風ふく夕ぐれはさびしかりけり  
 ⑦⑦ なほおのれ口ごもりがちにものいふもうらはかなしや人にまじりて  
 ⑦⑧ つかのまも萬人の目のはなれざるこの苦しさに驕慢もわく  
 ⑦⑨ 夕月夜花びらよりもかろげなる白波かくる岩をわれゆく  
 ⑧① たはぶれて言ひすぎをして小半日わびしがれるもなほ若きため  
 ⑧② 大海のそこひも天のかなたをもさぐらむとせず君のこゝろも  
 ⑧③ 舞ごろも五人あけのさうりして河原にいでぬ千鳥の中に  
 ⑧④ 木なき峰あさましからず白かばのみねよりわたり牛らねて居ぬ  
 ⑧⑤ かぜふけばうまにのれるものらざるもまばらに走る秋の原かな  
 ⑧⑥ 京のはしおしろいあつき舞姫のぬかさゝやかにうつあられかな  
 ⑧⑦ 白がねの魚鱗の上にふじありぬさがみの春の月のほるとき  
 ⑧⑧ 光氏が浅くさ寺ののき下にたもとをしぼる水無月のあめ  
 ⑧⑨ わがむかしうらわかき日はこふ君と世とつゝましくおもひてすぎぬ  
 ⑧⑩ われはうし生れながらにまほろしをうちともなへる目とおもふかな  
 ⑨① 三味線の一のいとのみかきならし時雨とほりぬ文をかくとき  
 ⑨② 白樺の折木を秋のあめうてば山どよみしてかさゝぎのなく



- ⑩② あまたこふは何ばかりなる身のほどにふさへることよするやをとこよ  
 ⑩③ 男をも灰の中よりひろひつる釘のたぐひにおもひなすこと  
 ⑩④ まつりの日あふひばしゆく花がさの中にも似たる人を見ざりし  
 ⑩⑤ にくかりしましたばこかなゆら／＼とけぶりを立てつなみだのまへに  
 ⑩⑥ 石まろぶおとにまじりて深山鳥大雨の中になくがわびしき  
 ⑩⑦ わたつみは夕のひとのまなさきに遠いかづちのおとしてきたる  
 ⑩⑧ はしらいふ誰まちたまふはるの夜を君はたよらに身じろぎがちに  
 ⑩⑨ 世はなりぬ龍女が梭のねもひゞきくがより海のなつかしき日と  
 ⑩⑩ うつせみのいのちといはず目に見えぬ無量の日生むことばとことば

☆

☆

「翻刻補注」⑤の結句中の〈見〉は、「漢字」の「見」か、「変体仮名」の字母の〈見〉か、分かれる所であり、「変体仮名」の  
 〈見〉(翻刻Ⅱみ)ともとれるが、本歌収載他本『明星』『常夏』『與謝野晶子集』『新潮社』『晶子短歌全集』『與謝  
 野晶子全集』(改造社)と対校の結果、その表記はすべて「漢字」の〈見〉であることが判明したので、それに従  
 って翻刻した。

(書誌学的資料閲覧の便宜を、藤井隆氏・広岡義隆氏に忝うしました。記して感謝の意を表します。)